第２０回日本高齢者虐待防止学会報告書（講演のうち一部／要約）

① 大会長講演　養護者支援から見えてくるもの－虐待の根底にある権力と支配－
演者：山口光治氏（淑徳大学学長、教授総合福祉学部教授）
三つの虐待（児童、障碍者、高齢者）の共通性について、各々の虐待が人間同士（虐待者と被虐待者）の関係性の中で起きるということであると言及しており、現在起きている虐待という事象を理解するには、彼らの現在の関係性だけでなく、過去からの関係性であったり、虐待者の過去の生育環境等についても幅広く理解し、虐待者の視点に立って、虐待に至るまでの過程を検証することの必要性について講演された。

② ＰＤ　高齢者施設における身体拘束の廃止に向けて
演者：乙幡美佐江氏（厚生労働省高齢者虐待防止対策専門官）外
身体拘束廃止に向けて色々な観点からの検討があるが、高齢者虐待防止措置未実施の介護事業所には、介護報酬減算を導入することで、事業所全体で身体拘束について考えていくことを期待していると考えられる。介護以外の分野でも取り組んでいくことになったのは期待すべきことである。
ケアの方法を考え、実践していくのは「人」である。虐待の発生要因が「教育・知識・介護技術に関する問題」であることか、施設で働く職員に対して当該問題を解決していくための様々な対応施策も重要である。

③ シンポジウム　虐待防止の取り組みの成果と課題： 虐待対応の連携をめざして
演者：柏女霊峰氏（淑徳大学教授）外
児童虐待・障害者虐待については初めて聞くことも多かったが、児童・障害者・高齢者どの虐待にも共通する課題があることがわかった。
また、課題が１つではなく「複合的な生活課題」を抱える家族の事例もあり、分野を超えた「地域包括的・切れ目のない継続的支援」が求められる。
今後、３つの領域で共通性がある点については、虐待防止のノウハウ等の情報共有をすることでそれぞれの虐待対応に役立てることも可能だと考えた。

④ 特別講演　介護人材不足と虐待　～介護施設の現場を中心に～
演者：結城康博氏（淑徳大学教授）
介護施設における人材不足の実態と、人材不足が介護職員による虐待事案増加の一因であることの考察について、講義がされた。
専門職後見人として、本人を虐待にあわせないために、監視的な役割を担っていくとともに介護職員の労働環境面（要介護者や親族からのハラスメントの予防や対応）にも寄与できる部分を探していきたいと感じた。